

## 「歌いまたは唱える」

聖歌隊 クリストファ 大西 信一

聖路加国際病院の名譽院長である日野原重明先生は、その著書「新しい音楽療法」の中で「私は聖路加国際病院に勤めているが、このチャペルの礼拝で歌われるキリエ、サンクトゥス、アニュス・デイはシューベルト作曲のものを採用している。これを歌う時は、単に詩編を朗読するのとはまるで違う宗教的心境に置かれる気持ちを実感するのである。」と述べておられる。私達が聖餐式で歌っているキリエ、聖なるかな、世の罪を、の三曲のことである。

聖歌以外に私達が声をそろえて、礼拝中に歌っているこの三曲は、実はシューベルトが作曲したドイツ・ミサ曲の一番、五番、七番が原曲となっている。彼は一九世紀初頭のオーストラリアの作曲家で、皆さんは「シューベルトの子守り歌」をご存知であろう。数多くの歌曲や交響曲などを残して三十一才という若さで世を去った。

ドイツ・ミサ曲は私達が礼拝で使っている祈禱書の言葉を基にした作品ではなく、当時、

教会音楽の民衆への普及運動をしていたノイマンという人が自由に書いたテキストに基づいて作曲されている。この時代にはドイツ語による宗教作品を教会で礼拝に用いることが禁止されていたことから、この三十分の小さいミサ曲はある種のコンサート作品として広く愛され、多くの編曲版を生み出している。

日本では日本基督教団出版の「讃美歌第二編」に、この全曲が九つの讃美歌として、そのままの形で使われている。米国では聖公会が現在使用している聖歌集「ヒムナル八二」の中に、一部、調号や音符が異なるが、編曲され収められている。

私達が歌っている三曲は、チャペルの主任オルガニストである林佑子先生が、この「ヒムナル八二」の曲をもとに、現在の祈禱書の言葉を使って作られたものと聞いている。古今聖歌集増補版にも林佑子編として「聖なるかな」が紹介されている。ハーモニーは聖歌隊大竹惟司兄によるものである。

外国の曲に日本語の歌詞をつけるのは大変難しい作業を伴う。林先生もだいたいお考えになった様子がうかがえる。特に「聖なるかな」の後半部分「ほめたたえよ、主のみ名なよつて」の言葉を音符にポイントイングするには、

かなり苦心をなされたのだろうと、私は推測する。決して早口にならないように、気持ちよこめて歌い、主を賛美したい。

詞に曲をつけるのが本来の姿である。しかし、私達が使っている聖歌集の多くが、外国の曲に日本語をつけたものである。もともとはラテン語だった祈禱書が英語へ、そして日本語へ、それも文語から口語へと、詩だけはどうぞん生まれ変わっていく中で、曲のほうは言葉使いによって曲想が変わらない程度に微妙に変化しながらも、生きつづけている。

二世紀も前のシューベルトの曲が、形が少し変わったとしても、私達の礼拝で使われ、守られていることは素晴らしい。日野原先生が感じられたのも、その歴史的な重みであろう。

聖餐式式文の中に「歌いまたは唱える」というルブリックが十箇所以上あることをご存知だろうか？ 聖路加ではそのうちの三箇所シューベルトの曲を使っているにすぎない。礼拝で私達が神様に向かって心をそろえ、言葉をそろえる為に、歌うことはひとつの手段として考えられる事だと思ふ。古今聖歌集増補版の第一部には二十もの式文用曲譜があるので、その中から今後いくつかを使用してみたらどうだろうか。